

論文の書き方についての注意

懸賞論文審査委員会

従来、提出された論文には、再三、似たようなパターンの形式的な不備と、技術的な欠点が見られる。内容的に優れたものでも、論文を書く上での形式的・技術的な常識を満たしていないと、低く評価、または失格となることになる。これらの欠点は少しの配慮があれば防げるものである。また、論文の書き方を身につければ、自分が言いたいことを、説得力をもって相手に伝える力がつく。技術上の注意点をいくつか記しておくので、良い論文を書く一助にしてほしい。また、個人的な体験談のみのもの、社会的ないし個人的な背景の解説だけのもの、単なる感想文、極端に文章量の少ないもの、など、「論文」とは言い難いものについては、評価選考の対象としないので注意すること。

1. 論文の冒頭部分で問題設定を明確に行い、先行研究を参照すること。
 - (1) 論文である以上、通常スタイルとしては、その冒頭部分（序、はじめに、第一章、序論、プロローグ等）において、例えば疑問文の形での問題設定があるはずである。同時に、なぜこういう問題を設定するのかについて、その理由あるいは自分の動機を書くことが望ましい。
 - (2) 論文全体がその問いに支えられ、全篇を通して、その問いに答えを与えて行くという形で論述が展開されるべきである。問題設定が不明確なままに、いきなり書き始めても良い論文にはならない。
 - (3) 関連する先行研究を十分に調べることは論文執筆において非常に重要である。「すでに何が問われ、いかに答えられてきたか、そして今なお問うべき問いは何か」を吟味するという先行研究の概観を行い、論文中に先行研究の知見に基づく論述をする場合には、その出典を明記すること。
2. 論文の末尾部分（結論、結び、終わりに、終章、まとめ、エピローグ等）において、冒頭の「問題」に対応する「まとめ」を書くべきである。「序」と「結論」とは、呼吸が合っていなければならない。
3. 調査に基づく論文は、必ず調査の概要を明記すること。
 - (1) 個人として行った調査か、ゼミ等で行った調査に参加したものか。
 - (2) 調査の年月日、場所、対象者数、回収率、方法（面接法、郵送法等）。
 - (3) 調査票あるいは調査票の内容がわかる資料を必ず添えること。
4. 目次、注および文献のリストをていねいにつけること。
 - (1) 論文には目次をつけること。なお目次を1ページ目とし、本文は2ページ目から頁付けをすること。
 - (2) 注は番号をふり、章末あるいは全体の末尾にまとめて記入するか、ページ毎に脚注として記入すること。なお引用注については、必ず引用箇所ページ数まで入れること。
 - (3) 文献は、注とは別に、全体の末尾に文献リストを添えること。
著者名、編者名、翻訳者名、書名あるいは論文名、掲載誌名、発行年、出版社名等を、明記すること。特にインターネット上の資料を掲載する場合には出典がはっきりしない場合があるので、URLおよびアクセス年月日も付記すること（ただしインターネット上にある資料でも、書籍や雑誌、報告書など印刷媒体がある場合は、印刷媒体を優先すること）。
5. 早めに準備に着手し、書き直しをすること。
 - (1) 一般に、一回の書き下ろしで良い完成稿をつくることは極めて困難である。第一次草稿→第二次草稿→（以下省略）→完成稿というように幾度も書き直して、できるだけ推敲を重ねると良い。

(2) そのためには、早め早めに準備に着手し、書き直しをする時間的余裕を作るように工夫すること。
時間切れのため、後半部分が展開不足となり惜しまれる論文がかなり多い。

6. 論文を書く準備として、常日頃から「読書ノート(あるいはカード)」と「自分の考え・発想を記すノート(あるいはカード)」という二系列のノートを蓄積しておくが良い。知識と発想の組織的蓄積なしには、良い論文を書くことはできない。

7. 論文要旨について

課題の設定、分析方法、論旨の展開、そして得られた結論などを600字程度(40字×15行程度)を目安として、明確にまとめること。審査員に自分の論文の意義をアピールするためには極めて重要である。

8. 論文の書き方について説明している本は多数あるが、参考までにその中の何冊かを挙げておく。

なお、本学図書館のHPの「法政大学蔵書検索システム(OPAC)」や「パスファインダー(テーマ別探し方ガイド)」などを利用するとよい。

- ・板坂 元著(1973年)『考える技術、書く技術』講談社現代新書
- ・板坂 元著(1977年)『考える技術、書く技術 続』講談社現代新書
- ・ウンベルト・エーコ著、谷口 勇訳(1991年)『論文作法 調査・研究・執筆の技術と手順』而立書房
- ・梅棹忠夫著(1969年)『知的生産の技術』岩波新書
- ・宇野義方・日高 晋・西原春夫・蓮見音彦著(1978年)『短文・小論文の書き方』有斐閣新書
- ・小笠原 喜康著(2002年)『大学生のためのレポート・論文術』講談社現代新書
- ・木下是雄著(1981年)『理科系の作文技術』中公新書
- ・木下是雄著(1990年)『レポートの組み立てかた』ちくまライブラリー36
- ・斎藤 孝著(1988年)『学術論文の技法 増補版』日本エディターズスクール出版
- ・酒井 聡樹(2006年)『これから論文を書く若者のために』共立出版
- ・澤田昭夫著(1977年)『論文の書き方』講談社学術文庫
- ・櫻井 雅夫著(1998年)『レポート・論文の書き方上級』慶應義塾大学出版会
- ・時事教育研究会編著(2000年)『論文・レポートの書き方と作文技法』画文堂
- ・清水幾太郎著(1959年)『論文の書き方』岩波新書
- ・白井利明・高橋一郎(2008年)『よくわかる卒論の書き方』(やわらかアカデミズム<わかる>シリーズ) ミネルヴァ書房
- ・杉原四郎・井上忠司・榎本隆司著(1979年)『研究レポートのすすめ』有斐閣新書
- ・高木 隆司(2000年)『理科系の論文作法』丸善
- ・田中共子編(2009年)『よくわかる学びの技法 [第2版]』(やわらかアカデミズム<わかる>シリーズ) ミネルヴァ書房
- ・阪田 せい子・ロイ・ラーク著(1998年)『だれも教えなかった論文・レポートの書き方』総合法令出版
- ・丸谷才一著(1980年)『文章読本』中公文庫
- ・鷲田 小彌太著(1999年)『入門・論文の書き方』PHP研究所

以 上